

令和3年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「共同利用型」の個人による研究 研究報告書

令和 4 年 4 月 13 日現在

研究課題名	ナゴルノ・カラバフ紛争における公共宗教のありかた： アゼルバイジャンの公式イスラームの動向から	
申請者	氏名	所属機関・職
	岩倉 洸	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特任研究員

研究成果の概要

本研究課題は 1980 年代から続くナゴルノ・カラバフ紛争が、アゼルバイジャン国内における公式イスラームのあり方にどのような変容をもたらしたのかを明らかにしようとしたものである。

アゼルバイジャンとアルメニアによるナゴルノ・カラバフ紛争について、要因、両国の政治体制、外交など多様な分野にわたって分析がなされてきた。しかし、紛争の拡大・沈静、体制の正当化などに関わる公式の宗教組織の動向は、宗教指導者による国際的な宣伝を除けば軽視されてきた。このような問題意識から、アゼルバイジャンにおけるイスラームを対象に、政府に近い立場である公式の宗教組織（政府と協力するウラマー組織「カフカース・ムスリム宗務局」と宗教行政組織「宗教団体担当国家委員会」）がナゴルノ・カラバフ紛争でどのような公共的な役割を担ってきたかおよび現在までの紛争の基本的な状況に関する資料を収集した。

2 度（2021 年 11 月 17 日～20 日、2022 年 3 月 7 日～10 日）に渡って北海道大学に滞在し、アゼルバイジャン語の新聞・雑誌、紛争に関する書籍や論文、北海道大学が契約しているデータベースを閲覧した。

資料収集の結果、まずナゴルノ・カラバフ紛争の要因や紛争状況などを整理した。さらに、1990～2000 年代までカフカース・ムスリム宗務局は、アルメニア使徒教会との宗教間対話を呼びかけていたが、2010 年代以降アルメニア使徒教会を敵視する言動が増加していることを明らかにした。また、2020 年に起きた紛争では「カフカース・ムスリム宗務局」と「宗教団体担当国家委員会」によって国民全体を対象とする慈善・文化活動の実施、宗教指導者による国内世論の形成、政府プロジェクトによる論文や写真コンテストの実施など、単なる外交には留まらない公共的な役割を担っている事例を発見することができた。このような活動の変化の背景については、今後の課題であり、そのことも踏まえて成果の発表を行いたいと考えている。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）※謝辞の有無について明記願います。

現時点（2022 年 4 月）該当なし

2022 年度以降、学会での発表を予定

当該研究活動をもとに採択された研究プロジェクト（応募中の研究プロジェクトを含む）

該当なし

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。